

「通常の学級における発達障がい等支援事業」実践研究のまとめ

～すべての子どもにとって  
「わかる・できる」授業づくり～

# 目 次

1. 集団づくり
2. 教室環境
3. 学習や生活のきまり
4. 授業の構成
5. 話し方、指示や声かけ
6. 板書、ノートやファイル
7. 教材・教具
8. 研究・研修の進め方

平成 25・26 年度 「通常の学級における発達障がい等支援事業」として、すべての子どもにとって「わかる・できる」授業や保育、集団づくりに関する実践研究を進めてきました。

研究成果の普及を図るため、フォーラムを開催するとともに、実践研究校園の取組を踏まえて、授業や保育、集団づくりにとって重視するべき観点ごとに項目を立て実践例を本冊子にとりまとめました。

各項目ごとに示したポイントをご理解の上、各校園の実態に応じて、今後の取組に生かしていただくようお願いします。

# 1. 集団づくり

大阪府では、これまでから、障がいのある子どもを含めたすべての子どもたちが「ともに学び、ともに育つ」教育を大切にしてきました。集団の中で、一人ひとりを尊重し、違いを認め合いながら、自尊感情を高め、互いを大切にする態度を育む集団づくりに取り組むことが大切です。そのためには、集団において、それぞれの子どもが役割を果たし活躍する場面、集団の中で他から認められる場面を意識し、子どもの自尊感情や自己有用感を高める集団づくりを行う必要があります。

## POINTS

### ① 自他の感情を理解し、互いを肯定的に受けとめられるように工夫する

#### 【課題】

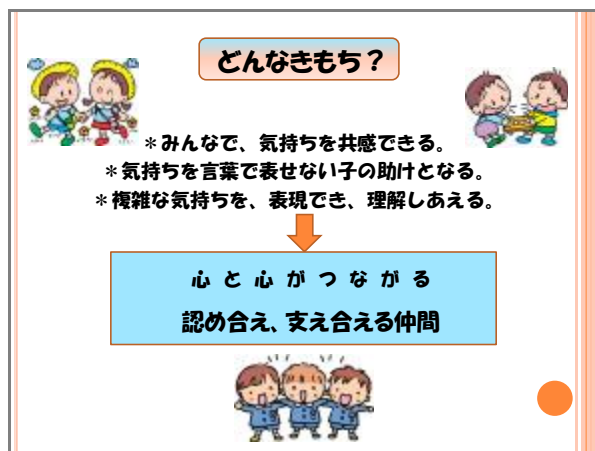
自分の感情をうまく伝えられなかったり、相手の気持ちを表情や言葉から察したり理解したりすることが苦手で周囲とうまくコミュニケーションがとれないケース

#### 【実践例】

- ・自分の感情を振り返る機会を設ける。  
(感情をコントロールしたり、他者の感情を理解することにつなぐ)
- ・TPOに応じた友だちとのやりとりを具体的に指導する。  
(場面に応じた自己表現の仕方、他者理解の具体的な方法を知り、感情のコントロールを行い集団参加のスキルアップを図る)



自分の気持ちを振り返させる(幼稚園)



### ② ペアワーク・グループワークを取り入れ、活動への参加の促進を図る

#### 【課題】

学級や友だちのことについて関心がうすく、学級の課題を解決しようとする意欲が低いケース

#### 【実践例】

- ・お互いの考えや思いを伝えあう場面を、学級活動だけでなく、教科指導など様々な機会に設定する。
- ・ペアワーク・グループワークを取り入れ、発表の機会を設け、授業に主体的に参加する意識を育てる工夫をする。  
(グループワークの際は、すべての子どもの活躍の機会が作れるよう人数の工夫をしたり、役割を決めたり、具体的なテーマを提示するなどして、単なる形だけの活動にならないようにすることが大切)



## 「ともに学び、ともに育つ」教育

「ともに学び、ともに育つ」教育を進めるためには、一人ひとりの子どもたちが、なかまの願いや思いを共感的に受けとめることのできる豊かな感性や、なかまとともに問題を主体的に解決していこうとする実践的な態度の育成等、人権尊重の教育の充実を図り、いじめをなくす実践力を培う必要があります。

障がい理解教育など人権課題に対応した教材による学習や体験活動を行うとともに、子どもたち自らの生活との関わりや、身近ななかまとのつながりを意識させることが大切です。

### 障がい理解教育を進めるためのポイント

- 障がいや障がい者に対して、表面的な理解に終わらず、体験的に学ばせること  
知識を単に一方的に教え込んだり、個々に学習させたりするだけでなく、子どもが、主体的・実践的に、他の子どもたちとも協力し合いながら、体験することを通して学習させること。自分で「感じ、考え、行動する」ことで初めて、目の前で起きたことに気付き、正しく判断し、実践的に行動することができる能力が身に付く。
- 学校、学級の実態や子どもの発達段階に応じた指導内容であること  
子ども理解に努め、学校、学級実態をふまえたうえで、それぞれに何を学ばせたいのかなど具体的なイメージを持つこと。
- 年間指導計画に基づいた計画的、系統だった指導であること  
これらの体験的な学習が、子どもそれぞれの中で深まり、広まり、自分の生き方と重ね合わせて考えることができるよう、発達段階に応じたねらいに基づいた系統的な指導を展開すること。さらには、幼稚園及び小・中学校が、それぞれがどのような学びを行っているかなどを知った上で交流し、連携して取り組むこと。
- 他教科や道徳、総合的な学習の時間とも関連づけ、学校教育活動すべてを通して指導を行うこと
- 実施後は、教材やねらいが適切であったか、子どもの変容についての評価を行い、次の指導に活かすこと  
この学習を通して、どのような力がついたのか、生活の場面にどう活かしたのかを振り返る機会があること。

## 2. 教室環境

教室は学校や幼稚園で、子どもたちが最も長い時間を過ごす場所です。子どもたちの実態にあった適切な教室環境を作ることは、学習や一日の生活を考える上で重要なポイントとなります。すべての子どもたちが、安心して学習や活動に取り組めるようにするために、座席の位置、黒板周辺の掲示物、学習用具などの整理整頓について配慮することが必要です。

また、先が見えない状況、あいまいな状況に対処することが苦手な子どもには、一日の見通しや各授業で行う内容を視覚化して示すことで、不安を軽減することが大切です。

### POINTS

#### ① 整理整頓された環境を作る

##### 【課題】

雑然とした教室環境で、学習の準備に時間がかかり、すぐに活動に取りかかれず、授業に集中できないケース

##### 【実践例】

- ・教室内の教材や個人の持ち物について、何を、どこに、どのように置くのか定位置を決める。
- ・どこに何があるのか絵や写真を使って示す。



定位置を決める

#### ② 視覚刺激の量を低減する

##### 【課題】

教室の前面（特に黒板周辺）に掲示物等が多く、必要以上の情報があり、どこに注目してよいか分かりにくかったり、集中できなかつたりするケース

##### 【実践例】

- ・掲示物を精選し、必要に応じて教室の後方に掲示する。
- ・教室の前方にロッカーや戸棚がある場合は無地のカーテンなどで覆う。
- ・子どもの実態に応じて、教室の前面の掲示物の量を調整する。



### ③ スケジュール（時間の流れ）を掲示する

#### 【課題】

一日の学習の流れやそれぞれの時間に準備する物について、言葉による指示だけでは見通しが持てず、不安で集中できないケース

#### 【実践例】

- ・ 一日の予定や授業の流れが確認できるよう、ミニホワイトボードに書いて掲示したり、黒板の定位置に掲示する。
- ・ 授業の途中で、「今、何をしているか」「次に何をするのか」を確認できるように掲示する。（授業の内容が分からなくなるきっかけが、内容の理解の以前にどこをやっているか分からない場合がある）
- ・ 予定の変更は、口頭で伝えるだけでなく、見て確認できるようにする。
- ・ 情報量が多い場合は、プリントにして配付する。
- ・ 終わりがはっきり分かるような指示の出し方をする。（時間を区切って、タイマーで時間の経過を示す。「～の5ページまで」「このプリント3枚で～は終わり」と指示する等）
- ・ 学校行事や一年間の学校生活についても、視覚化することで安心につながる。



「今、何をしているか」「次に何をするのか」が分かる（小学校）



時間の区切りを視覚化

絵を使って視覚化（幼稚園）



時間の区切りを視覚化



年間行事を写真で掲示（中学校）



# 3. 学習や生活のきまり

学習や活動に取り組む際、教職員の指示や、決められたルールがうまく理解できずに失敗し、自信を失くしてしまう子どもがいます。指示やルールの理解を助ける工夫を行うとともに、日々の学習や生活の中で成功体験を積み重ね、子どもたちどうしが、お互いのよさを認め合えるように配慮することが大切です。

## POINTS

### ① 指示を理解しやすくする

#### 【課題】

言葉の指示だけでは、何をどうしたらいいか理解しにくく、授業に集中できなくなるケース

#### 【実践例】

- ・ 絵や写真で具体的に示したり、例えば整列する場合に床にガイドとなるテープを貼るなど、分かりやすいてがかり（先行条件）を用意する。
- ・ 学級の実態を踏まえて、教科の特性に合わせた学習活動のきまりを抽象的な表現ではなく、具体的に表現し、掲示する。

（学級担任と教科担当で学習時のルールが大きく異なることがないように、年度当初はもちろん、日頃の連携を大切にします。）

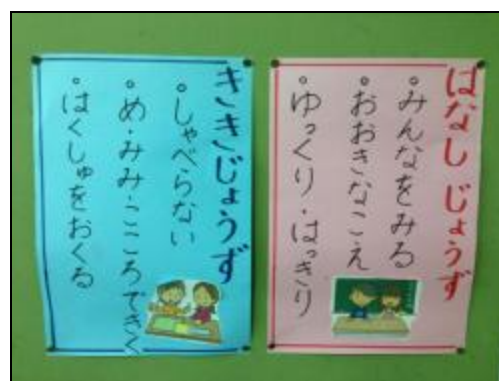


先行条件を整え、自己肯定感を高められるサイクルをつくる

分かりやすいてがかり（先行条件）

→ 成功体験

→ 自己肯定感



ルールを明確にすることが大切

# 4. 授業の構成

ゴールが不明確なまま授業を進めると、そのことが一因となり、学習に不安を感じ、集中して取り組めなくなる場合があります。授業の構成は、子どもの発達段階や、教科の特性等を考慮して行うものですが、教える側の都合だけで授業を進めてしまうということはないでしょうか？子どもの思考の流れに沿って授業を構成し、教職員が教え込む授業から子どもが主体的に学ぶ授業構成にする工夫が必要です。

## POINTS

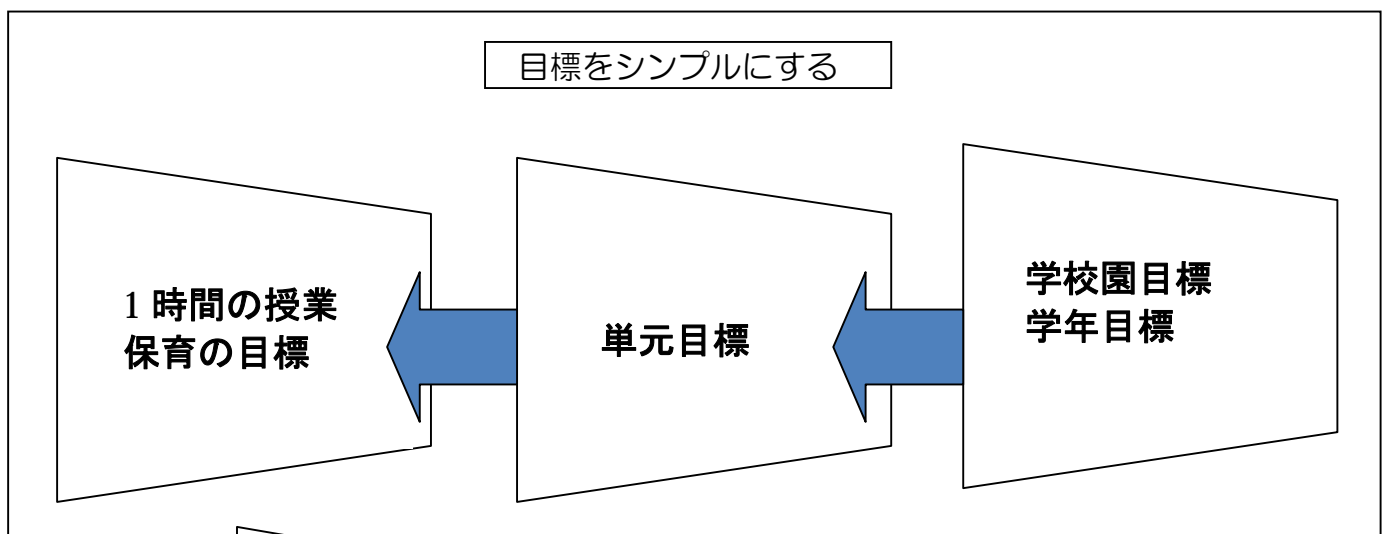
### ① 授業・保育のねらいを焦点化して指導計画を立てる

#### 【課題】

授業の目標がしぼりきれしていないため、子どもが何を学習すればいいのかわからないケース

#### 【実践例】

- ・ 目標や活動をシンプルにし、子どもたちが、授業のめあてを明確に意識して学習に取り組めるように工夫する。
- ・ 目標について、学校⇒学年⇒単元⇒1時間の授業とゴールから逆算的（バックワード）に考え、1時間の目標を設定する。（下図参照）
- ・ 評価について、何がどのようにできれば、目標を達成したかを明確に示す。
- ・ 論理的に組み立てられた授業にするために、指導案作成のプロセスを工夫するとともに、重視すべき観点を明示する。（下記参照）



#### <指導案作成のプロセスを工夫する>

- ① 育てたい力、何を学ばせるのかといったねらいを明確にする
- ② 子どもたちが主体的に学ぶ、学習の過程を踏まえた授業構成にする
- ③ 子どもたちが出合った課題を積極的に受け止め、意欲的に向き合うような導入にする
- ④ 子どもたちがどのように課題に向き合い、課題解決するかを検討する
- ⑤ 子どもたちがどうしが考えをつなぎ、考えを深める工夫をする
- ⑥ 子どもたちが自分の言葉で自己の学びを振り返り、自己評価する工夫をする
- ⑦ 授業を通して子どもたちのどのような成長をめざすのかを明確にする



## ② 子どもが主体的に取り組めるように授業構成を工夫する

### 【課題】

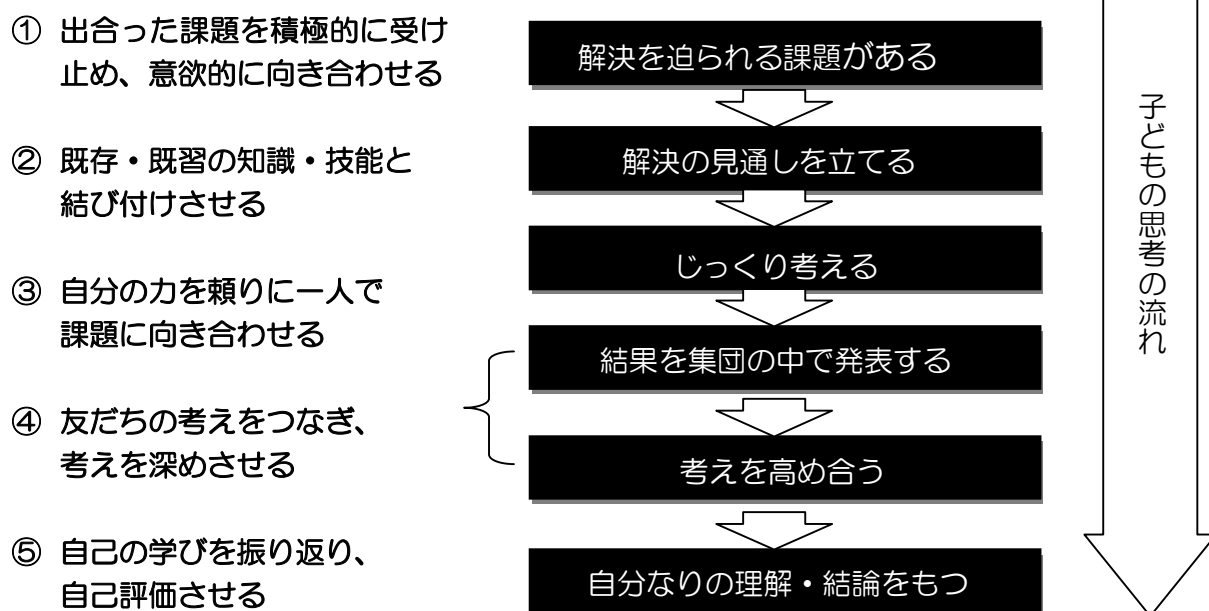
一方的に教え込むような授業で、子どもが主体的に学習する意欲が持てないケース

### 【実践例】

- ・子どもの興味・関心を高め、動機づけを図ることができるよう授業の構成を工夫する。
- ・子どもが主体的に取り組めるような課題設定を行い、課題解決のための思考の手がかりを持たせる。
- ・一人で考える時間、ペアやグループでの学習の時間等、ねらいに応じて様々な学習形態を取り入れる。
- ・振り返りの時間を設定し、自分の学びを確認させる。

### 子どもの思考の流れにそって、学習課程を構成する

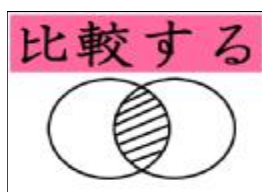
日常生活の中で、人が課題に出合ったときに行う一連の営みを、1時間の授業というフレームに当てはめてみると右下のようになります。この流れを踏まえて授業構成を工夫することが大切です。授業づくりのポイントを左下のように5つの段階にまとめてみました。



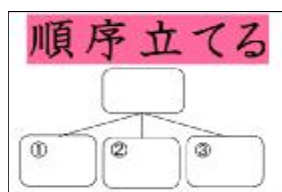
<「大阪の授業スタンダード」 大阪府教育センター 平成24年5月 >

### 思考ツールを使って「考える」指導の工夫

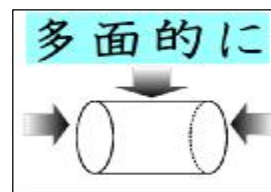
授業構成を工夫した上で、「思考ツール」を授業に取り入れ、「考える」とは何をどう活動したらいいのか、児童の活動を具体化し共有する取組のために、このようなカードを活用



比べることで「ちがい」と「共通点」に気付かせる



順番を考えるだけでなく、まず「分ける」それから「順序立てる」



物事を捉えたり、発表させるときにいろいろな角度から考える

# 5. 話し方、指示や声かけ

学習活動・保育や生活のあらゆる場面において、教職員は、言葉を使って、子どもに働きかけます。しかし、自分の考えを伝えたい時、無意識に強い口調で、大きな声で話す等、それぞれ話し方に特性があります。子どもは常に大きな声で指示されると、何が大切なのか理解できなかつたり、主体的に考えられない場合があります。声のトーンを工夫したり、抽象的な言葉を使わないように配慮することや、「今から3つのことを説明します。1つめは…。2つめは…。3つめは…。」と順序立てて説明するなど、子どもにとって、分かりやすい話し方、指示や声かけをすることが必要です。また、授業への参加を促進する工夫や肯定的な表現を使って話しかけることで、子どもの安心感や自己肯定感を高めることが大切です。

## POINTS

### ① 具体的な指示、個別の声かけの工夫をする

#### 【課題】

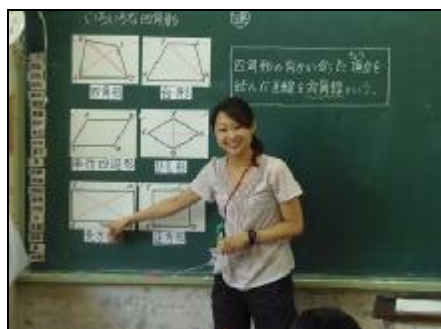
指示した内容が理解できないために落ち着いて話が聞けないので、学習活動に取り組みず、十分に本来の力を発揮できないケース

#### 【実践例】

- ・ 抽象的な表現、あいまいな表現をできるだけ避け、具体的な表現に置き換える工夫をする。  
(「きちんと」「ちゃんと」「しっかり」などの言葉は使われることが多い言葉ですが、内実は何をもって「ちゃんと」しているか共有していないことがある)
- ・ 教科のねらいを踏まえて、子どもが主体的に学ぶ意欲が持てるよう指示、声かけの工夫をする。
- ・ 指示に集中できる環境を整える。  
(声のトーンをおさえる、絵や写真などを活用する。)
- ・ 子ども同士の考えをつなぐ。  
(「今の意見についてどう思いましたか」などと投げかけ、友達の発表に対して傾聴できるよう指導する。)

#### 言葉の変換(例)

- 「ちゃんと座る」→「背筋をのばして座る」
- 「ちゃんと聞く」→「相手の顔を見て聞く」
- 「はっきり話す」→「ゆっくりと大きな声で言う」
- 「さっさとする」→「タイムタイマーが0になるまでにする」



子どもの授業への参加を促進するためには、「一方的に聞く時間」を減らすとともに、一人ひとりの子どもが主体的に考える時間をいかに充実させるかが大切です。

具体的な指示や発問が子どもの学習意欲を高める

## ② 子どもとの信頼関係をつくるための声かけ（非言語も含めて）等の工夫

### 【課題】

自分のがんばりが認められていないと感じ、自分勝手な言動がみられるケース

### 【実践例】

- ・結果や過程を認め、プラスの声かけを意識して行う。  
（子どものつぶやきや表情に対するアンテナを高くしておくことが大切。）
- ・活動したことや理解したことを認められる場面をつくる。  
（机間指導の際に、できていることを確認するなどしながら個別に声かけし、必要な支援を行う。）
- ・分からない時に子どもが、指導者へ質問しやすい環境をつくる。
- ・授業を妨げない関わり方（非言語の対応）で伝える。  
（視線を投げかける、うなずく、微笑むといった表情やジェスチャー等。）



自分から、なかなか「分からない」「手伝って」という気持ちを伝えられない子どももいます。「てつだってカード」や「ヘルプカード」などを使って、アドバイスを受けやすい環境づくりの工夫が大切です。

「てつだってカード」で、気持ちを伝えやすくする工夫

### 幼稚園での取組

#### ハード面

- ・視覚支援
- ・スケジュール表示
- ・教室の構造化

#### ソフト面

- ・褒め方、認め方
- ・話し方
- ・注意の仕方

\* 子どもとの信頼関係

#### 褒め方・認め方

- ・短く
- ・具体的に伝える

#### 話し方

- ・無駄な言葉は省く
- ・非言語（ジェスチャー）  
+ ヒソヒソ声
- ・大事なことはゆっくり
- ・「あー」、「えー」は省く

#### 注意する時

- ・短く
- ・簡潔に伝える

- ・ルールをはっきり
- ・指導する基準を伝える
- ・一貫した指導
- ・集中する時間をつくる

クラスには刺激が  
いっぱい!

- ・友だちの声
- ・注意する声
- ・先生の声
- ・物を落とす音
- ・椅子を動かす音

静かにされようと大きな声を出すとそれがまた刺激となり、さらに大きな音や声を出す。



言葉の刺激を見直し、保育に非言語をとり入れる

### 言葉の刺激を減らすために

- ・言葉の代わりにアイコンタクトやジェスチャーで伝える。
- ・抑揚のある話し方を心がける。  
（大事なところはゆっくりと大きな声で）
- ・同じ言葉を繰り返さない。
- ・具体的に、簡潔な言葉を使う。
- ・全員が静かになり、落ち着く瞬間をつくる。
- ・好意に満ちた言葉がけをする。

# 6. 板書、ノートやファイル

板書は学習内容の要点の整理、意見の交流や理解を深める上で有用です。また、ノートは子どもが主体的に学び、思考力・判断力・表現力を育む上で、重要な役割を果たしています。従って、板書は事前に授業の流れや構成が端的にまとめられた板書計画を作成する等の工夫が必要です。また、ノートについては「めあて」、「課題」、「自分の考え」や「授業の振り返り」などを書く欄を作り、書き方や書く内容についての指導をすることが大切です。あわせて、ワークシートや説明資料などを綴じるファイルについても、どんな情報を、どのような順番で残していくのかといった指導が必要です。

## POINTS

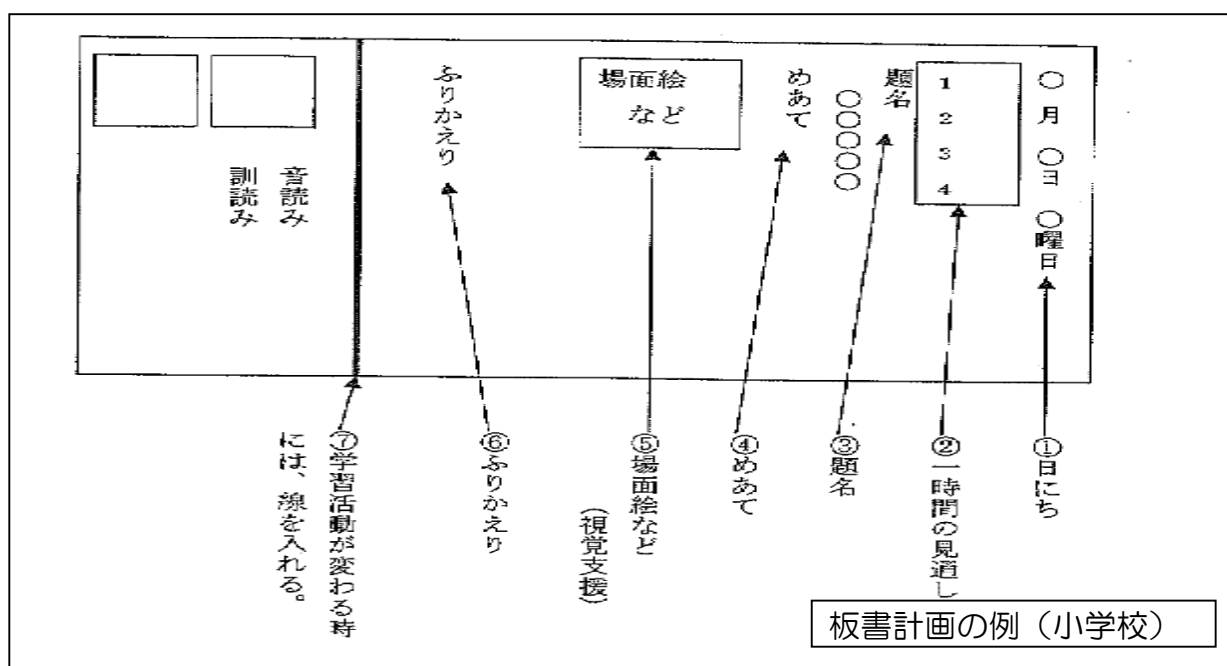
### ① 板書はポイントを簡潔にまとめ、授業内容を確実に伝えられるよう工夫

#### 【課題】

板書の注目すべき個所を自力で気付けない、学習した内容を整理してノートに書けないケース

#### 【実践例】

- ・ 導入、展開、まとめなどの授業の流れに沿って、学習内容の要点を板書する。
- ・ よく使う指示や発問、ポイントやめあてを示すものはカードにしておき必要に応じて活用する。
- ・ チョークの色とノートの取り方（白色のチョークは鉛筆、カラーチョークは赤鉛筆など）は授業の約束として伝え、定着を図る。  
（チョークを使う場合は、色あいや座席から見える角度や光の反射などによる見えにくさに配慮することが必要）
- ・ 黒板を線で分割して、どこに何が書いてあるかを分かるように配置する。
- ・ 板書とノートやワークシートの形式を一致させることで、写す負担を軽減する。



- 手順や流れを書く
- 授業の流れや子どもの思考が分かるようにする
- 教科書の絵やイラスト、キーワードはカードも活用
- 板書とノートの関係を明確にする（写す位置、重要度の表し方、色使いなど）

全教職員で共通のカードを作り活用することが、授業や保育づくりを組織的に進めることにつながります。



## ② ノートの取り方やファイルの整理の方法を定着させる

### 【課題】

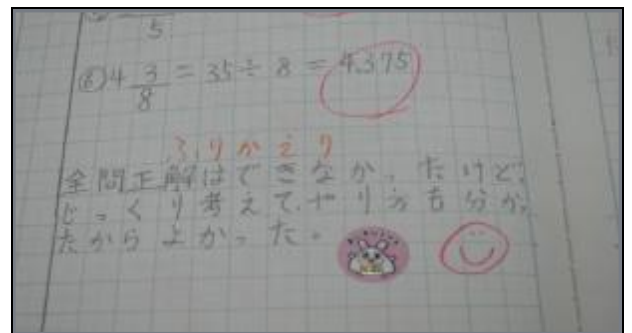
黒板を写すのに時間がかかり、学習内容の定着や考えを深めることにつながっていないケース

### 【実践例】

- ・ノートやファイルの役割を意識させる。  
(ノートが単に黒板を写すだけのものではなく、知識を整理したり、物事を考えるツールとなることを理解させる)
- ・教科の特性や学年に応じたノートやファイル、筆記用具の選び方を指導する。
- ・発達段階に応じて、板書の内容とどのように一致させるか指導する。  
(番号、記号、色などの使い分けやノートのどの位置に写すかなど具体的に決める)



補助線を入れて、どこに何を書くか明確にする



ノートの役割を意識させる工夫



学校では、多くの配付物（プリント類）があります。これらを「ちゃんと整理しなさい」と言われただけでは、何をどのように整理したらいいのか、十分理解できない場合があります。具体的にどう分類したり、どの順番で整理するかを指導するとともに、整理した後でどのように活用できるかも伝えることが大切です。



# 7. 教材・教具

視覚にうったえたり、具体の作業をとおした学習は効果的です。その際、多様な学び方をしている子どもに配慮し、集団の実態に応じた教材・教具を作成、活用することが必要です。文字の大きさや配色の工夫、実物を提示するなど視覚教材の活用、目的に応じICT機器を有効に活用するなどの工夫が大切です。

## POINTS

### ① 具体物やICT機器を効果的に活用する

#### 【課題】

言葉による説明だけでは、学習内容を十分に理解できない。提示された課題に興味をもてないケース。

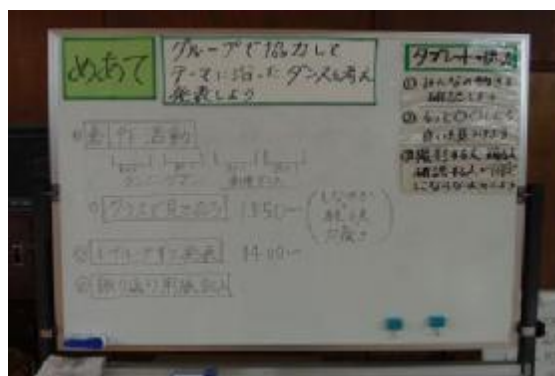
#### 【実践例】

- ・指導内容や発達の段階等に応じてICT機器を活用して、学習内容に関連した写真や図表を具体的に示したり、動きや変化する様子を動画等で示すことは、学習内容の理解にたいへん役に立ちます。

(目的を明確にせずにICT機器を使用しても、大きな効果は期待できない。学習面や生活面での困難さを的確に捉え、目的を明確にして活用することが大切)



具体の動きを示すことでイメージをつかみやすい



ホワイトボードを活用して学習のめあてや流れを示す



タブレット型端末で自分たちのダンスの動きを確認

## ② 子どもの実態に合わせた指導や教材を準備する

### 【課題】

読むことや書くことに困難（「集中して字句を追うこと」や「字句の形態や空間関係のみて認識すること」などが苦手）があり、最初から学習に参加できていなかったり、時間をもて余したりしているケース

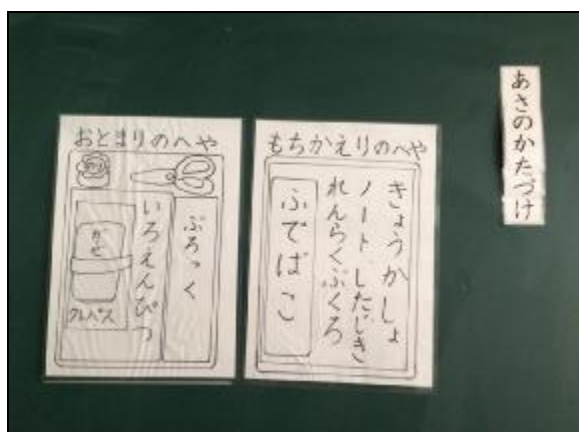
### 【実践例】

- ・書くことが苦手な場合、黒板の内容を書き写すのに時間がかかる場合には、前述の板書の工夫に加え、板書と同じようなワークシートを用意したり、ノートに補助線を入れて、どこに何を写すかを把握しやすくする。
- ・読みが苦手な場合には、「言葉のまとまりに丸を付ける」「助詞に丸を付ける」「読む行に定規をあてる」といった工夫や、読みの理解のために文の内容を頭の中にイメージできるように絵や写真を使い視覚的に提示する。
- ・次のステップに進むことができる子どものためのワークシートを準備する。（下記参照）
- ・大事なことは要点をメモさせ、記憶を助けたり、要点を整理する力を育てる工夫をする。（メモするスキルは教科指導だけでなく、連絡帳への記入時にも指導が可能）



必要に応じて既習事項のヒントカードを活用

授業の中で個別の配慮が必要な場合、こうした教材を準備することや、前述のように「絵や写真などを使って視覚支援する」「ペアワーク・グループワークで参加を促進する」「肯定的な声かけをする」といった指導をスタンダードにすることが大切です。



伝え方を工夫するとイメージしやすい

### 一つの課題が終わった時に、次にすべきことを指示する

（何もすることがない「空白の時間」があることで、学習に取り組む気持ちが途切れてしまう）

- ・子どもの理解度に応じたワークシートを複数準備するようにする。
- ・ペアワーク、グループワークや学級全体で先生役をする。
- ・問題を自分で作ったり、多様な解決方法を考える。
- ・10回の練習を終えたら、次のゴールを決めて練習する。



# 8. 研究・研修の進め方

授業づくり、集団づくりについての研究・研修については、学年や教科の枠を超えて、学校園全体としての取組を行うことが大切です。その際、教職員の視点や論点が共有されるよう、アンケートや調査等を活用した子どもの実態把握や、何を解決するために取り組むかについての課題設定、before/after での変化の把握など、PDCA サイクルに基づいた研究体制の確立が大切です。また、公開保育、公開授業などを含め、計画的に校内研究をすすめることが必要です。

## POINTS

### ① 教職員間での情報共有と、組織的に研究を進める体制づくり

#### 【課題】

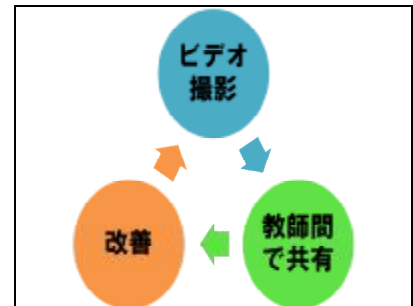
授業づくりの工夫が一部の教職員に偏っており、全体のものになっておらず、教職員によって指導に大きな違いがあり、子どもが混乱するケース

#### 【実践例】

- ・ 学年や（中学校においては）教科の偏りなく、すべての教職員が、研究授業を実施できるような校内研究体制を整える。
- ・ 研究授業前に、授業後の討議の視点を予め定めておく。
- ・ 指導の様子を撮影し、それを討議の場で全員で視聴して、改善のために討議する。さらに改善後の様子を撮影し、それをもとに討議するといった研究の工夫をする。

#### 幼稚園での取組より

- 園全体で子どもの姿を把握し、支援の方法について考えていく体制づくりに取り組んだ。教職員全員で情報を共有するために、ビデオ撮影を行い、子どもの姿や教職員のかかわり方について話し合い、取組を改善した。



朝の会で、身支度を済ませ全員が集まって出欠確認をとる際に、なかなか落ち着いて会を進めることができない

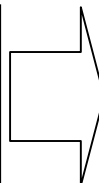


#### ビデオ撮影

ビデオ撮影を行い、その後ビデオをみながら「保育室の環境」「教職員の関わり」などについて話し合い、改善点を出し合う。

#### 見えてきた改善点

- ・ 教職員が抑揚のある話し方を心掛ける
- ・ 名前を呼ぶ順番を決めない
- ・ 子どもの姿勢を正す
- ・ 座る場所が分かりやすいように線を引く



#### 改善の結果

- ・ 集中して話を聞くことができた
- ・ 出席調べに注目するようになった
- ・ 話を聞く姿勢につながった
- ・ 押し合うなどのトラブルが減った

## ② 子どもの実態把握（集団や個々の子どもの傾向）を踏まえた指導

### 【課題】

授業づくりの工夫をしているが、本来の子どもたちの力が十分に発揮されていないケース

### 【実践例】

- ・ 集団や個々の子どもの「得意なこと」「できること」や「苦手なこと」の傾向をアンケート調査（アセスメントシート、アンケート、QUなど）で把握する。

※Q-Uは学級集団をアセスメントし、より適切な支援をするための補助ツール

- ・ 学力テストや体力テストの変化、子どもの学習習慣や生活習慣の変化等、数値で表すことのできる客観的なデータを比較して、子どもの成長を見取る。

「学級集団の状況把握のためのアセスメントシート【幼稚園版】」（大阪府教育センター 平成25年4月）

	0 2性別 (男1、女)	0 誕生月	1 衣服の着脱	2 排泄の自立	3 食事	4 睡眠のリズム	5 ことばの理解	6 ことばの表現	7 絵を描く	8 動作の模倣	9 運動	10 器用さ	11 注意集中	12 多動・衝動性	13 他の子どもへの関心	14 共感性	15 コミュニケーション
1																	
2																	
3																	
4																	
5																	
6																	
7																	
8																	
9																	
10																	
11																	
12																	
13																	
14																	



「校内研究の葉」（大阪府教育センター 平成25年3月）

